

平成24年度
日本造園学会関西支部大会
研究・事例報告発表要旨集

Proceedings of the Kansai Branch Meeting of
Japanese Institute of Landscape Architecture

平成24年10月27日(土)・28日(日)
京都大会

主 催

社団法人 日本造園学会 関西支部

Kansai Branch of
Japanese Institute of Landscape Architecture

■ 研究・事例発表セッション（口頭発表）プログラム

<第1会場・至誠館 2階 S22 教室>

第1セッション：10：00～11：00

渉成園の江戸時代後期における利用形態からみた空間構造

○加藤友規（植彌加藤造園（株）） 1

興福寺旧松林院池庭と山口家南都別邸

○仲結花（奈良県まちづくり推進局）・仲隆裕（京都造形芸術大学） 3

大阪府藤井寺市M邸の実測調査

福原成雄・○堀川孟史（大阪芸術大学） 5

第2セッション：11：00～12：15

泉大津市政70周年記念庭園について

○福原成雄（大阪芸術大学） 7

兵庫県内の日本庭園の類型化と植栽を中心とした維持管理について

○羅ジ・林まゆみ（兵庫県立大学/淡路景観園芸学校） 9

外国人に向けての日本庭園観賞プログラムについての研究

○熊倉早苗（植彌加藤造園（株））・曾和治好（京都造形芸術大学） 11

大泉の森から緑陰都市へ 大泉緑地「百年の森」につどう環境芸術のとりくみ

○森宣之・浅野正行・保坂啓明（一般財団法人大阪府公園協会）・
下休場千秋・福原成雄・松久喜樹・若生謙二（大阪芸術大学） 13

第3セッション：13：30～14：45

縁日市の空間構成についての考察

○新森朗（大阪芸術大学） 15

飯田市動物園「フンボルトペンギンの丘・アンデスコンドルの崖」設計・施工

○若生謙二（大阪芸術大学） 17

樹木発電

○中澤公博・福原成雄（大阪芸術大学） 19

神戸市スマート都市づくりの適用に関する研究

○朴秀日（神戸芸術工科大学） 21

1. はじめに

渉成園は、東本願寺歴代宗主の隠居所として設けられた庭園で、従前より森蘊、村岡正、尼崎博正らの研究成果により、その変遷についてはかなり解明されているといえる。しかし、一方で、その庭園がどのような空間構造のもとにどのように利用されたかについては、確たる史料が確認されなかったこともあり、あまり研究が進んでいなかったのが実情であった。

こうした中で著者は平成 23 年(2011)の親鸞聖人七百五十回御遠忌を機に真宗大谷派所蔵資料の詳細な調査を実施した。そこでは、渉成園に関する絵図史料などが新たに確認されるとともに、東本願寺の坊官たちが残した膨大な日記類からも渉成園に関する記述が残されていることが判明した。本論では、こうした新史料も含めて、渉成園の利用形態からみた空間構造を解析することを試みた。

2. 調査手法や資料など

渉成園に関する資料には、先学の調査研究成果や上述した真宗大谷派所蔵資料、近世の刊行物や近代の写真など様々なものがあるが、今回は、当時の東本願寺家臣団が残した日記・記録類を時系列に編纂した『東本願寺史料』（昭和 14～18 年・1939～43）をはじめ、安永 8 年から嘉永元年（1779～1848）頃に制作されたと推測される『東御殿惣絵図』と、渉成園が焼失した安政 5 年（1858）以降に制作されたと考えられる『安政度枳殻邸総図』という 2 枚の絵図をもとに解析を行った。

文献史料である『東本願寺史料』については、渉成園の利用、特に接客・接遇に関する記録を抽出し、園内の利用経路を分析するとともに、利用方法に一定の傾向があるかについての解析した。また、2 枚の絵図については、それぞれを比較し類似点や相違点を抽出したうえで、建築群と庭園における空間構造についての解析を試みた。

3. 文献史料による渉成園の利用形態

一般に隠居屋敷と説明されることの多い渉成園ではあるが、『東本願寺史料』の解析により、老中や公家など、幕府や朝廷の中枢人物を迎える迎賓施設として利用されていることが判明した。また、類似例をまとめることにより、渉成園の東西南北それぞれにある門は、用途により使い分けられており、南門は公式の来客を迎えるもので、入園後も園内を巡覧したり、船に乗って池（印月池）を渡ったりと園内を広く利用しているのに対し、北門は記録類には「内々」と表現される非公式の来客を迎えるもので、滴翠軒など、園内のごく一部の空間を利用するのみで、庭園を巡覧するというよりは、能やお囃子など、管弦を楽しむための催しが中心であったことが判明した。さらに西門は本来は通用門であった

こと、東門は通常は利用されなかったことも明らかとなった。

一例として、水野忠成（みずの ただあきら、宝暦 12 年～天保 5 年・1763～1834）が老中の職にあった文政 8 年(1825)9 月 10 日夕刻に涉成園を訪れた記録を見ると、南門を入れて大書院に案内された忠成は宗主の挨拶を受け、煎茶を喫した後、漱沈居前より船に乗って縮遠亭に向かい、薄茶を喫しながら宗主の法話を聞いて後、回棹廊、丹楓溪を経て滴翠軒や傍花閣を眺めてから偶仙楼に上がっている。忠成は当初、食事は不要と断っていたが、実際には用意された酒や食事を頂戴して夜半に帰っている。おそらく 2 階にあった偶仙楼から夕やみ迫る「涉成園十三景」の情景を眺めながら飲食を楽しんだのではないかと思われる。園内を巡覧する中で、煎茶も抹茶も両方出されているという点も興味深い。

4. 絵図史料による涉成園の利用形態

『東御殿惣絵図』と『安政度枳殻邸総図』を比較すると、庭園部分については、園路や植栽に部分的な変化が見られる程度であるが、建物やその周辺については、安政 5 年(1858)の焼失による再建により、かなりの変化があったことが読み取れる。このうち滴翠軒については、入り口や周辺の園路が変更されていることから、北門から入園する「内々」の客の利用にあわせて種々の改造を行ったと推測される。

また、両図は建物内の部屋が数色で着色されている。凡例が無いために分類方法に不明な点はあるが、接客や公式行事のための表向きの空間や、宗主の日常の生活空間、厨房のような使用人の利用する奥向きの空間といったように、用途により塗り分けられているものと考えられる。この色分けの区分から、敷地西側の建物群は様々に拡充され、特に宗主の居住空間ともいえる中奥の空間が充実していく様子が窺える。

5. まとめ

以上、文献史料と絵図史料の分析を総合すると、涉成園内での庭園と建物の利用形態の変遷が明らかになってくる。特に、文政年間(1818～30)以降、利用形態の変化に伴い涉成園の空間構造にも変化が見られた。そこでは、隠居屋敷としての利用形態を基本にしながらも、二つの迎賓施設の領域が色濃く反映している特徴が窺えた。すなわち、表向きの空間が、正客用の迎賓施設（南門から入園して庭園の大部分を巡覧する領域）と、内客用の迎賓施設（北門から入園して滴翠軒周辺を巡覧する領域）の二つの領域に分割されることが明らかになった。

また、多くの諸史料を分析していく中、こうした空間構造の変化を伴った江戸時代後期の涉成園は、頼山陽の『涉成園記』をはじめとして、多くの文学・芸術作品が誕生する時期でもあり、建物のような施設面（ハード）の充実とともに、文化的（ソフト）にみても黄金期といえる円熟の時代であったことも明らかになったのである。

文献 1) 加藤友規(2012)：涉成園の空間的特質に関する研究 — 利用形態と情景の変遷にみる時代性の考察 — ：京都造形芸術大学大学院博士論文

ポスター発表

1 都市公園における指定管理～関西文化学術研究都市記念公園の事例～

加藤友規・○北森さやか・山口隆史（植彌加藤造園（株））

関西文化学術研究都市記念公園（けいはんな記念公園）は、平成 7（1995）年に学研都市の建設を記念して、また、平安遷都 1200 年記念事業の一環として整備された京都府立公園である。平成 18 年 6 月に京都府により指定管理者制度が導入されて以降、現在に至るまで植彌加藤造園株式会社が管理運営業務を継続して行っている。管理運営にあたっては、より良いサービスと利用活性化を目指して「良きハード、良きソフトの提供」を続けている。それにより、利用者数の大幅な増加を達成するという結果を得ることができた。今回はその取り組みについて紹介したい。

2 京都「岡崎の杜動物公園」のデザイン：

七代目小川治兵衛による九つの庭園の空間的特徴の応用

○フアン・パストール・イヴァルース・今西純一・深町加津枝（京都大学）

対象とした京都東山山麓に位置する庭園には、庭園を自然と融合させるために植治が用いた 3 つの空間的特徴がある。庭園と背景の「空間的連続性」は、流れの連続性、樹木による囲い、有機的・自己相似的形、庭園の構成線、庭園内の空き空間、意図的な岩の配置によって体现される。「空間の奥行き」は、森の入口、森の空き空間、森の奥の三つの自然の原型的空間を通過したり、樹木の群植や滝、流れ、飛び石、S 字型の園路の配置を見ることによってもたらされる。見る人と、庭園や背景のランドマークとの「空間の距離」は、岩や樹木を側面に配置する一点透視の技法や、空き空間の連続的なリズム、森の奥から振り返った時の眺めによって強調される。これらのコンセプトを、「岡崎の杜動物公園」のデザインに応用した。1) 三つの池とそれをつなぐ川は背景のランドマークに向けて配置される。2) 動物園の機能を有する三つの大屋根が「森の奥」として、背景のランドマークに入り口に向けて配置される。3) 「森の空き空間」のような多様なパティオが動物の生活空間として設けられ、それらは背景の谷に向けて等比級数的にサイズが減少する。4) 自己相似に基づいた新しい形。5) 自然素材の使用。結果として、1) オープンスペースの中の幽玄な空間デザインによる奥行きの創造、2) 琵琶湖から水が流れてくることをアイデアとした、背景から流れる水の錯視。南禅寺谷やその川に見る空き空間のつながり、3) 園路の背景のランドマークとの連続性という、植治の革新的取り組みを受けた現代的デザインがもたらされた。

3 2011 年度山陰海岸ジオパークマネジメントプランの基礎調査と課題の整理

○中橋文夫（鳥取環境大学／環境設計（株））

山陰海岸ジオパークは面積 4%が山陰海岸国立公園に指定されるものの、残りの 96%は市町村域全体とされ、ジオパークとしての保護保全策は十分ではない。そこでパークマネジメントを視座として本研究に着手した。①研究の前提では、山陰海岸ジオパークの概要、